

果樹の主要な病害虫の発生状況（3月）

※農薬の情報は、令和7年3月1日時点の情報です。
※農薬の使用にあたっては、農薬ラベルを必ず確認してください。

1 モモ

(1) せん孔細菌病

春型枝病斑の発生予測モデル（農業総合センター果樹研究所令和3年度普及成果）によると、令和7年度の発病枝率が2%以上のほ場割合は、5.4%と予測され（図1）、平年（23.7%）より少ない予想となりました。なお、令和6年度の予測値は2.8%で、実測値は0.0%でした。

本病は、気象条件によっては急激な拡大のおそれがあるため、春型枝病斑のせん除等を徹底してください。

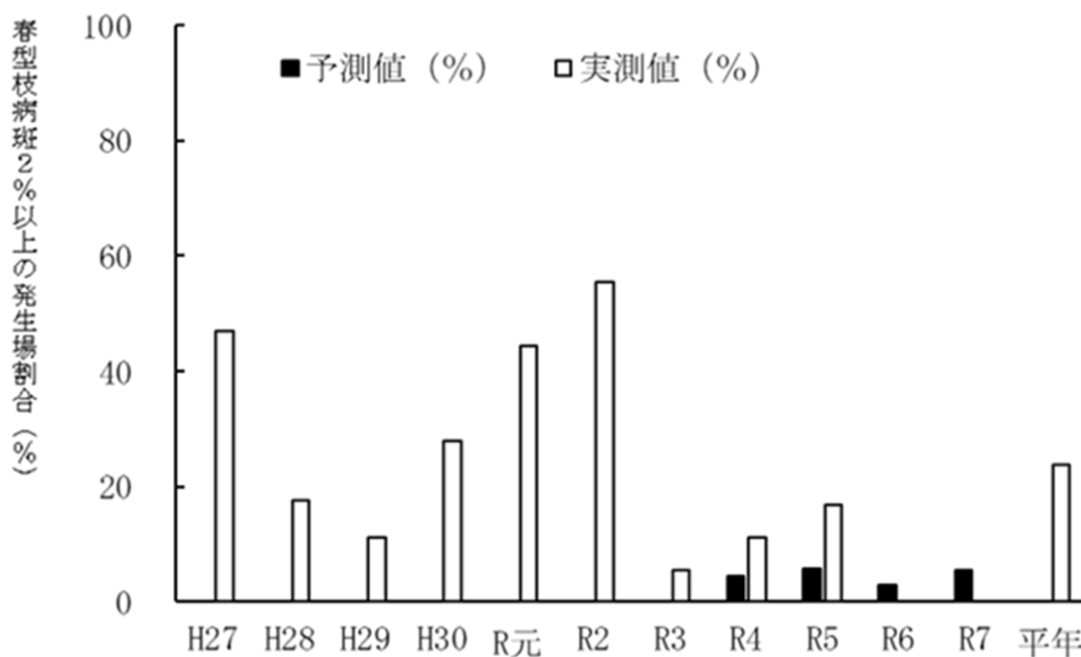


図1 モモせん孔細菌病の春型枝病斑の発生予測と年次比較

(2) モモハモグリガ

越冬成虫が確認された発生地点割合は平年よりやや高い状況でした（図2）。中発生や多発生も確認されています。

初期の発生密度を抑えるために、第1世代幼虫発生期（落花10日後）にモスピラン顆粒水溶剤4,000倍を散布しましょう。

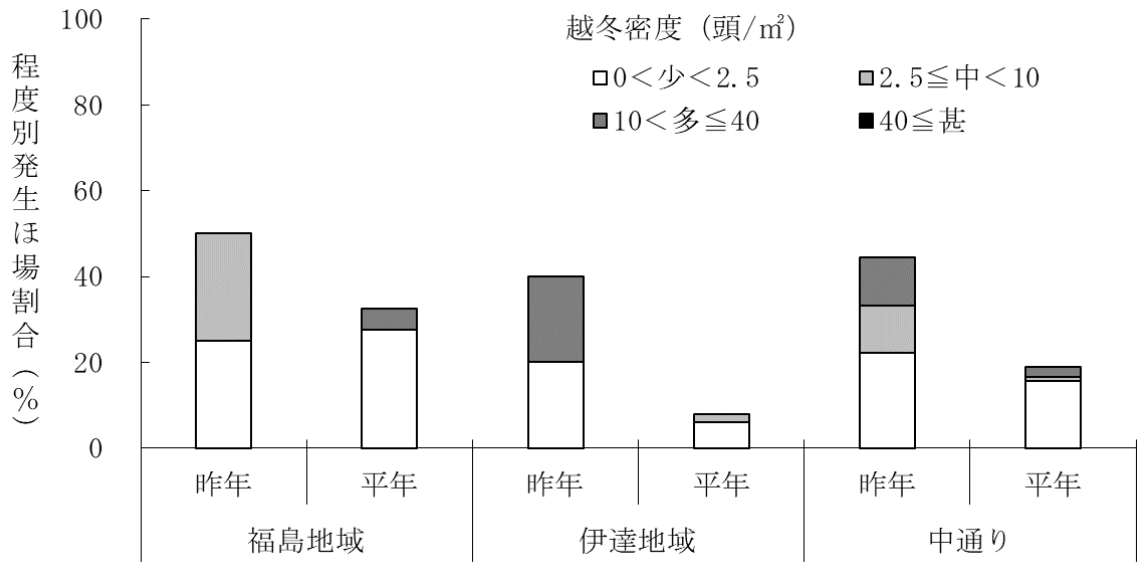


図2 モモハモグリガの越冬状況 (令和6年12月)

(3) シロカイガラムシ類

前年秋期の側枝寄生の発生ほ場割合は、平年並でしたが、「中」発生のは場も一部で確認されています(図3)。発芽前にマシン油乳剤を遅れないように散布しましょう。

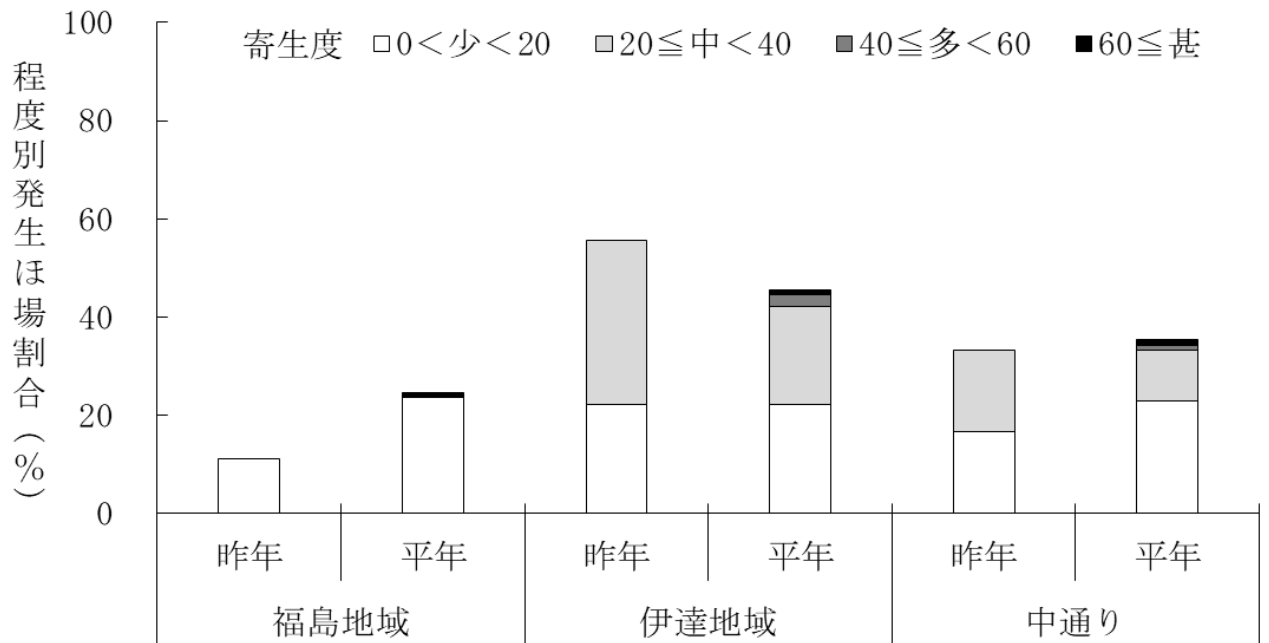


図3 モモ側枝におけるシロカイガラムシ類の寄生状況 (令和6年10月)

3 ナシ

(1) ナシ黒星病

ナシ黒星病の秋型病斑の発生ほ場割合は、県北では例年並、県中・県南ではやや低い、浜通りはやや高い状況でした。なお、浜通りで発生がみられたのは、いわき市のみなので、いわき市では特に注意が必要です（図4）。

発芽10日前までの石灰硫黄合剤10倍、発芽1週間後のオキシラン水和剤500倍の散布を遅れないように実施しましょう。

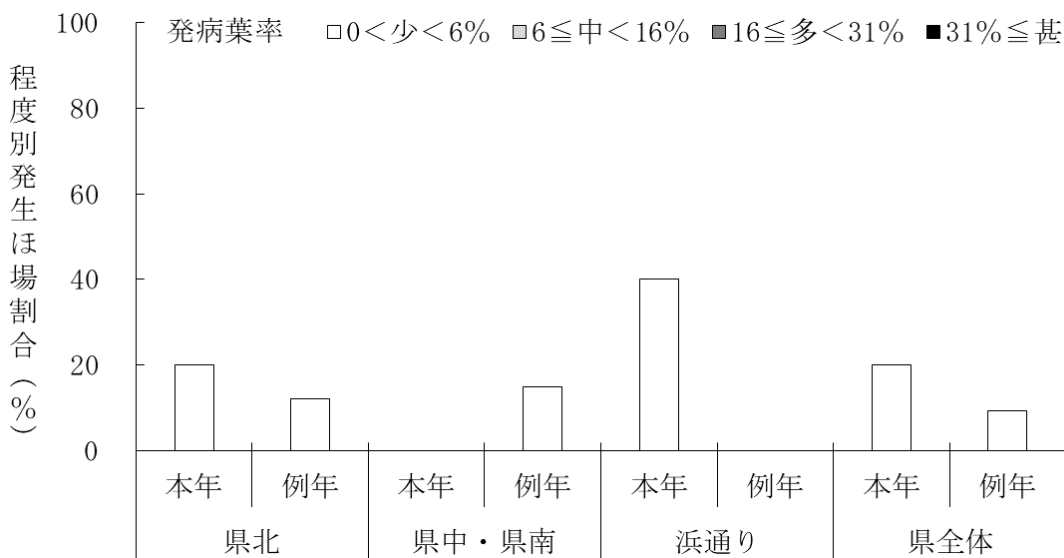


図4 ナシ黒星病秋型病斑の発生状況 (令和6年10月)

(4) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ)

令和6年10～11月に、クサギカメムシの越冬個体数を調べるため、むしろトラップによる調査を実施しました。その結果、越冬量は、県北地方の福島市では平年より少なかった一方、桑折町は平年より多かったため、今春の越冬世代の発生には注意してください。会津若松市では平年より多かったため、今春の越冬世代の発生には注意してください。いわき市では平年並の状況でした。なお、冬期の低温による死亡や春期の気温によって発生動向は左右されるので、令和7年に実施するフェロモントラップ調査も参考にして、発生動向に注意してください。

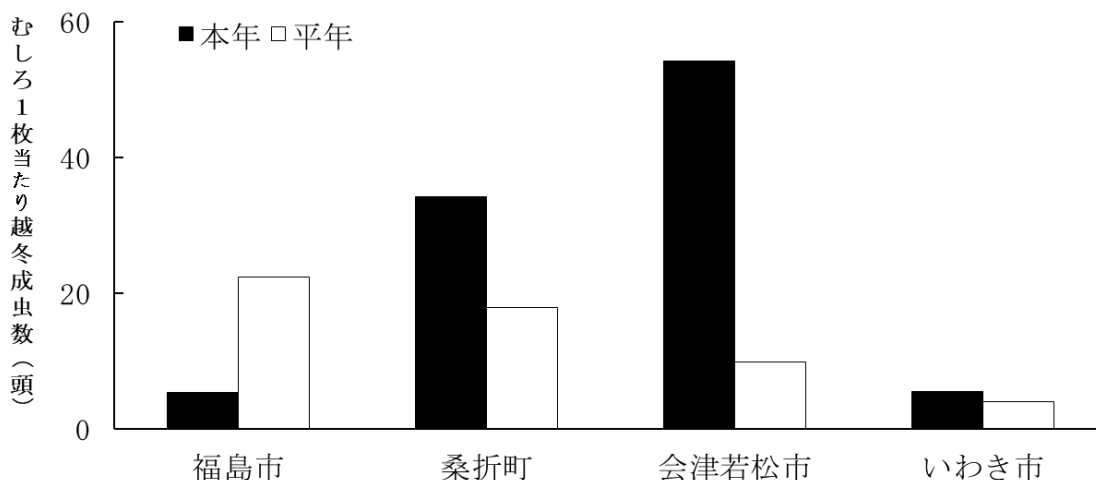


図5 クサギカメムシの越冬状況 (令和6年11月)